

## 最晩年の良寛（その1）木村家の小屋へ

藤原 道夫

良寛の書について感想を述べながら、良寛最晩年のことに触れたい。とはいえ、誰かが著したことを参照するしかない。以下に満年齢に基づき最晩年に至る経緯を追ってみる。

良寛（1758・11・2生）は47歳になる頃、生家に近い国上山山腹にある五合庵に定住する。座禅など仏道に精進しながら里に托鉢に出て、時に子供らと遊びもした。一方で和歌や漢詩を詠み、また書の研鑽に励む。その生活も年齢と共に身に應えるようになり、58歳頃村落により近い乙子神社の社務所に移った。そこでの生活がどのようなものであったか、詳しいことは分からない。托鉢にも出たであろうが多くの人が物を持参して訪ねたようだし、必要な物を送ってほしい旨の手紙も書いている。質素な生活とはいえ、ものに不自由はなかったようだ。お礼はどうしたかーただ手を合わせたか、言葉を掛けるか簡単な法話を語ったか、人によっては書を贈ることもあったか。現在残っている書の多くはこの時代に書かれた。

68歳になる頃から身体の衰えが目立ってくる。島崎に住む木村家当主が「うちに来ませんか」と声を掛けると、良寛は素直に従った。木村家は屋敷内に庵を建てる積りだったが、とりあえず空いている木小屋を改修して住んで貰う。そこは8畳ほどの広さで中央に炉が切っており、竈と流し、それに厠も付いていた。ここで多くの人たちと交流しつつ余生を過ごす。

翌年秋、誰も想像していなかったことが起こる。40歳年下の貞心尼が訪ねてきたのだ。その前に、和歌を中心とした手紙のやりとりがあった。それにしてもあの時代に単身の若い尼僧が老齢とはいえ単身の僧を訪ねるとは、尼によほど強い意志が働いたと考えられる。これについては次回に。

70歳になった頃、三条一帯に大きな地震が起き、甚大な被害が出る。島崎に近い与板では親しい俳人山田氏の子息が犠牲になった。それを聞いた良寛は見舞いの手紙を書く。「・・・災難に遭う時節には災難に遭うがよく候、死ぬ時節には死ぬがよく候、是はこれ災難をのがる妙法にて候」老荘思想に通じた良寛だからこそ書けた文である。受け取った山田氏はこれを理解したよう。しかし現代では全く受け入れられない考えだ。近代科学が発達する前に生きた良寛だ、地震の惨状を目の前にして呆然とするばかり、あの手紙を書くのが精一杯だったのだろう。